

接触場面を活用した日本語教育プログラムの構築に向けて —「日本人学生とのディスカッション」に対する留学生の意識から—

末田 美香子

1. はじめに
2. 先行研究
3. 調査
 - 3.1 対象クラスと参加者
 - 3.2 実践の手順
 - 3.3 調査資料
4. 結果と分析
 - 4.1 活動参加に対する意識
 - 4.2 日本人学生参加による利点と問題点
 - 4.3 学びと気づき
5. まとめと考察

要旨

本研究では、初年度日本語教育プログラムにおいて試みた「日本人学生とのディスカッション」から、留学生の接触場面に対する参加意識を分析し、接触場面を長期的、継続的、体系的に取り入れるための日本語教育プログラム構築に向けた考察を行った。

分析の結果、1) 参加前に感じる不安は、日本語能力の低さを危惧し、接触場面に不慣れであることから生じる 2) 参加後は、情意面での肯定的評価が得られ、日本社会・文化、日本語に関する様々な気づきや学びを意識化した 3) 日本人学生の参加利点

として「ネットワークの拡大」「日本語学習に適した機会」が多く挙げられた 4) 日本語学習については、社会的な学習ストラテジーの有効性を意識化した 5) 「自己のコミュニケーション」「接触場面のインターアクション問題」「異文化接触に関する気づき」に関しては意識化が不十分である等が明らかになった。

更に、日本語クラスにおける接触場面の留学生の参加意識として「場面ホスト」という概念を提示した。

以上から、今後の接触場面活用のあり方として、1) 継続的な接触場面の経験による不安の軽減と自信の向上 2) テーマ設定の工夫による多方面の意欲向上 3) 接触場面におけるインターアクション問題の意識化の促進 を組み込んだ教育プログラムが有用であることが示唆された。

キーワード：真のインターアクション・
言語ゲスト・言語ホスト・
場面ホスト

1. はじめに

近年、グローバル化の進展、企業からのニーズ等に伴い、日本語教育においては諸外国と日本のコミュニケーションの架け橋となる高度外国人材として「ブリッジ人材」の育成が求められるようになり、異文化調整能力や異文化接触による多様な価値観の創出の重要性が指摘されている（堀井 2013a）。

その一方で留学生は、意外なほど学内の日本人学生や、ビジネス経験のある日本人との継続的な交流経験が少ないことが指摘されており（堀井 2013b, 館岡 2015 等）、本学の留学生の現状も同様である。

筆者は1～2年次の留学生の日本語教育を担当する中で、「日本人学生と共に学んでいるものの、色々なことを心を開いて話す機会は少ない」「日本人学生とうまく話せない」「せっかく日本に来たのに日本人の友達はいない」等の声を多く聞いており、本学の留学生も日本人学生との継続的な「接触場面¹」の経験や深い交流経験が少ないと感じた。

そこで、教育プログラムの中に接触場面を取り入れ、日本社会・文化の多様性の提示や学習の動機付けの向上を図る実践を試

みた。

本研究では、これらの教育実践のうち、日本人学生の参加が最も多く得られた「ディスカッション」に対する留学生の接触場面の参加意識を分析する。そして、教育プログラムの中に長期的、継続的、体系的に接触場面を活用した活動を取り入れるという視点から、今後に向けた考察を行う。

2. 先行研究

日本人参加者を活用した日本語教育実践は、ビジターセッション²、協働学習等、近年多くの機関で実践されており、学習の動機付けの向上、日本語の実際使用の観察力・認識の向上、日本社会・文化の多様性の提示、異文化理解等の面で有効性が報告されている³。

留学生は、教室で得られた知識をそのまま使用するだけでなく、参加者や話題、状況に応じたインターアクション・ルールを考慮し、意識的に管理する必要がある。教師以外の日本人との接触場面は、真のインターアクション⁴を行う機会であり、自然で、総合的な日本語使用が促される。

しかし、日本語教育プログラムの中に長期的、継続的、体系的に接触場面を取り入

1 2つ以上の異なる文化が接触し、他の言語や文化のメンバーとコミュニケーションを行う場面（ネウストブニー 1995:216-218）。

2 教室に教師以外の母語話者を招き、学習者に意義のある目的のもとで言語を使用し、真のインターアクションを行う実際使用のアクティビティの1つである。

3 トムソン木下・舩見蘇（1999）、高橋・古川（2000）、末田（2003,2004）、横須賀（2003）、館岡（2015）等による。

4 ロールプレイ等の語学の「練習」や、教師によりコントロールされた日本語による環境ではなく、実際場面において意義のある目的のもとで言語を使用するインターアクションを指す。

れるという視座に立ち、接触場面の有意義な活用のあり方を論じた研究は管見の限り見当たらず、その方法論は十分に確立されていない。

ネウストプニー（1995）では、インターアクションのための日本語教育について「現代社会における日本語教育は、語学教育だけでは十分ではない。インターアクション教育でなければならない」と述べ、単なる語学（言語能力）教育から、コミュニケーション（言語能力プラス社会言語能力）教育へ、更にはインターアクション（言語・社会言語および社会文化能力）教育へ移行してきたことを指摘し、社会・文化・経済的なインターアクションができること、体系的に社会言語・社会文化能力を取り入れることを求めた⁵。本研究においてもこのような立場で日本語教育を捉えることを支持する。

更に、2つ以上の異なる文化が接触する「接触場面」においては、母語話者同士の「母語場面」とは異なる特徴が存在する（ネウストプニー 1995）⁶。ファン（2006）は接触場面における参加者に「言語ゲスト」「言語ホスト」という役割があることを指摘し、それぞれの役割を規範とした言語管理を行

うとしている⁷。

本研究では、このような接触場面の特徴を活かし、教育プログラムの中に長期的、継続的、体系的に取り入れるという視座に立ち、留学生の接触場面の参加意識を分析する。

3. 調査

3.1 対象クラスと参加者

日本人学生を活用した教育実践は筆者が本学に特任として着任した 2016 年から現在にかけて様々な活動⁸を試みたが、本研究では、日本人学生の参加が最も多く得られた 1 年次の聴解・口頭表現のクラス⁹における「日本人学生とのディスカッション」を調査対象とする。この科目の主たる目的は大学の授業を理解するための聴解・口頭表現のアカデミックスキルを養成することである。

本学の留学生の国籍は中国、ベトナム等、アジア圏が多い。日本語レベルは日常生活のことが何とか表現できる中級レベルから、社会的な話題や専門科目¹⁰の内容に十分ついていける上級レベルまで幅広く存在している。本研究の参加者は中級から上級

5 ネウストプニー（1995:10-11）による。

6 典型的な特徴として「フォリナー・トーク」がある。

7 ファン（2006:135）による。「言語ホスト」としての調整ストラテジーには「発話量を増やす」「話題を提供する」等があり、「言語ゲスト」としての調整ストラテジーには「言語・非言語行動で助けを求める」「話題の回避」等がある。

8 「インタビュー」「ディスカッション」「発表を聞いて質問」「ピアレスポンス」等を行

った。

9 本学における正式科目名は「アカデミック・ジャパニーズ 1A・2A」（留学生必修科目）であり、筆者は 3 クラスを担当していた。

10 留学生のみが履修する科目ではなく、日本人学生と共に履修する一般教養科目や専門科目・ゼミ等を総称して便宜上「専門科目」とする。

レベルの3クラスの留学生、合計40名である。

日本人学生は、国際交流課や専門科目の担当教員に協力を求めて募集した。本研究の参加者は36名であった。参加者の内訳は以下の通りである（表1・表2）。

表1 留学生の内訳

国籍	人数 (男/女)
中国	34 (12/22)
ベトナム	4 (1/3)
ペルー	1 (0/1)
スリランカ	1 (0/1)
合計	40 (13/27)

表2 日本人学生の内訳

学年	人数 (男/女)
1	26 (15/11)
2	6 (3/3)
3	3 (2/1)
4	1 (0/1)
合計	36 (20/16)

3.2 実践の手順

活動の手順としては、まず、留学生のみで、ディスカッションを行った。事前指導として、意見を述べるのに必要な日本語表現・テーマに関する背景知識・語彙の習得を促した。

その後、より内容のあるディスカッションにするため、日本人学生を交えて活動を行うことを伝え、日本人学生に対する質問、ディスカッションのポイントを考えさせた。

テーマ選択に当たっては、日本人学生との単なる交流ではなく、日本社会・文化を多角的に捉える機会とするため、社会的なテーマであり、留学生が興味を持つもの、日本人学生の情報や意見を得る価値があるものという観点から選択した。1回目が「若者言葉の是非について」、2回目が「コンビニの24時間営業の是非について」である。

日本人学生には、事前にテーマの内容を伝え、参加希望者を募った。活動前の注意点として「日本語で話すこと」「留学生の日本語でわからないことがあれば、遠慮なく本人に確認すること」を確認した。

ディスカッションの実施形態は留学生3～5名に対して日本人学生1～2名のグループを組めるように日本人学生の人数を調整した。これには、あくまで留学生主体の活動であることを双方に意識させ、「言語ゲスト」「言語ホスト」としての役割を中和させるねらいがあった。

実践回数は各クラス2回である。1回目は2017年6月に行い、2回目は同年12月に行った。各回の留学生の参加者は同一である（表1参照）。

3.3 調査資料

活動参加後に留学生にアンケート調査を行った¹¹。質問項目は、①「事前の不安感」②「参加後の感想」③「自己のコミュニケーション¹²」④「日本人学生参加による利点と問題点」である。質問項目の具体的な選択肢の内容は、接触場面への参加をどのよ

11 日本人学生にもアンケート調査を行い参加意識を調査したが、この分析は別の機会に譲る。

12 言語能力、及び社会言語能力を含めた自己の能力を指す。

うに評価したか、気づきや学びは何か、自己のコミュニケーションを客観化していたかを知ることを目的に先行研究¹³を参考に考案した。

アンケートでは、上記に関する選択式の回答を得ると共に、具体例の記述欄を設けた。更に、「活動から学んだこと」について記述欄を設け、「日本人学生から知ったこと」「日本語について気がついたこと」「活動から得た新しい考えや気がついたこと」について、日本語での自由記述を得た。2回の活動実施毎に同一参加者に同様のアンケートを行い、合計80件（各回40件）の有効回答を得た。

4. 結果と分析

以下では、質問項目の内容ごとに出現割合¹⁴、記述内容を示し、割合の大きい順に提示する。なお、各回における回答は実施期間が大きく離れていることもあり、大差が見られなかったため、今回は①「事前の不安感」を除き、2回の回答をまとめて分析した。

4.1 活動参加に対する意識

① 事前の不安感

参加前に不安を感じていたかを尋ねたところ1回目は58%、2回目は48%、2回を平均し53%が不安を感じていた。初回に比べて2回目は若干割合が少ないが、その具体例¹⁵としては両回とも「日本語が下

手だからうまく話せるか」「日本人の言葉がわかるか」「スムーズにいくか」「緊張感」等の記述があり、日本語能力を危惧するものや、接触場面に不慣れであることが要因になっていた。

② 参加後の感想

表3 参加後の感想（複数選択可）

項目	%
楽しい	88
日本事情や文化について知り、視野が広がった	75
自国文化、価値観について考えるきっかけになった	36
テーマに関する考察が深まった	27
日本人の質問・コメントが役に立った	17
日本人の意見は留学生と違うと感じた	15
日本人と共感できることが多かった	8

活動参加後の感想（表3）では、「楽しい」（88%）が最も多く、情意面での肯定的評価が高い。次に、半数以上の学生が「日本事情や文化について知り、視野が広がった」（75%）という感想を抱いている。更に、「自国文化、価値観について考えるきっかけになった」（36%）「テーマに関する考察が深まった」（27%）が全体の3割程度を占め、「日本人の質問・コメントが役に立った」（17%）「日本人の意見は留学生と違うと感じた」（15%）「日本人と共感できることが多かった」（8%）が1割程度である。

テーマに関する考察が深まることは、日本人学生の参加そのものによる利点であるかは不明確だが、通常クラスでの留学生の

13 末田（2003,2004）等による。

14 小数点以下は四捨五入した。

15 留学生の記述の引用はすべて原文のままである。

みの活動に比べて、具体的な日本人の情報や意見が得られ、日本社会・文化の様々な気づきや学びを意識化し、情意面での肯定的評価が高い。

③ 自己のコミュニケーション

表4 自己のコミュニケーション

(複数選択可)

項目	%
思ったよりうまく話せた	25
積極的に意見が聞けた	22
日本語がわからなくて困った	12
あまり積極的に聞けなかった	2

自己のコミュニケーション(表4)に関しては、「思ったよりうまく話せた」(25%)「積極的に意見が聞けた」(22%)となっており、2割程度の学生の事前の日本語によるコミュニケーションの不安の緩和が窺える。

一方、「日本語がわからなくて困った」(12%)「あまり積極的に聞けなかった」(2%)のように、日本語力の低さを実感する、積極的に接触場面に向かっていけないという学生も見受けられる。

しかし、全体的には、自己のコミュニケーションに関して意識している留学生は少ないことがわかる。

4.2 日本人学生参加による利点と問題点

表5 日本人学生参加による利点

(複数選択可)

項目	%
日本人と友達になれる	97
日本語を話す練習になる	83

新しい言葉を知ることができる	73
日本語の話し方が観察できる	70
色々な情報や考えを知ることができる	62
自国のことを日本人に話せる	50
実際の日本語を知ることができる	40
日本語の言葉や文法を教えてもらえる	35
日本語を勉強する意欲が高まる	30

表6 今後の実施希望と問題意識

項目	%
今後も日本人学生との活動を行いたい	88
活動中に問題を感じた	5

日本人学生の参加による利点(表5)については、「日本人と友達になれる」(97%)が最多であり、交流による日本人とのネットワークの拡大を期待している。次に「日本語を話す練習になる」(83%)「新しい言葉を知ることができる」(73%)「日本語の話し方が観察できる」(70%)と日本語学習の機会に適していると捉えた学生が8割程度と多い。更に、「色々な情報や考えを知ることができる」(62%)「自国のことを日本人に話せる」(50%)「実際の日本語を知ることができる」(40%)「日本語の言葉や文法を教えてもらえる」(35%)「日本語を勉強する意欲が高まる」(30%)と続いている。

興味深いのは、半数の学生が「自国のことを日本人に話せる」ことを利点として意識していることである。留学生活の中で、このような機会に乏しく、自国のことを知ってもらうことに喜びを感じていることが窺える。

今後も日本人学生との活動を希望する学生は88%であった(表6)。4.1 ②「参加

後の感想」(表3参照)にも見られたように、情意面での肯定的評価、日本社会・文化の様々な気づきや学びを意識化したこと、自国のことを日本人に話す機会が得られたこと等が今後の活動希望にも影響しているのだろう。

前述の「日本人学生とうまく話せない」「色々なことを心を開いて話す機会は少ない」といった留学生の声と照らし合わせてみると、専門科目と日本語クラスとでは、日本人学生に対する話しかけやすさ、会話持続のしやすさ、情意面において異なる参加意識を持つようである。上記は、日本人学生が主たる参加者である専門科目の接触場面の「言語ゲスト」としての立場と、日本語クラスの継続的な主たる参加者としての立場の違いによるものも大きいと考える。つまり、ここでは留学生は「言語ゲスト」であると同時に、場面のホストという異なる立場を所有するという特徴がある。インターアクションの評価は、参加者としてどのような役割を果たすべきか、期待されているのかという場面の意識も重要な影響を及ぼす。

加藤(2010)では、接触場面がどこで行われるかにより、コミュニケーション行動が変化することに着目し、母国、あるいは会話相手よりも長くその場に居住しており、その国に関する知識が豊富であるため、心理的・認知的に優位な立場にある者として「場所ホスト」という概念が示されている¹⁶。しかし、本研究では、その場所に長く滞在し、優位な立場にあるという概念で

はなく、その場面の主たる参加者として特定の役割を期待され、意識化され、何らかの調整を行い得る立場であるかという捉え方から、「場面ホスト」「場面ゲスト」という概念を提示したい。従って、留学生はここでは「場面ホスト」としての役割を担い、そのことも肯定的な評価や学びに重要な影響を及ぼしていると考える。更に、日本人学生側も「場面ゲスト」としての参加役割を意識し、双方が通常クラスとは異なる接触場面の参加意識を持ち合わせたものと考えられ、この点が具体的にどう影響したのかは興味深いが、この分析は別の機会に譲る。

一方、日本人学生の参加による問題を意識した学生は5%であり、具体的な記述もなく、ほとんどの学生は意識していなかった。これについては、日本語クラスにおいて、このような接触体験を継続的に積み重ねていないことから、未だ問題の意識化に及んでいないと考えられる。

4.3 学びと気づき

表7 「活動から学んだこと」の内容分類

項目		件	%
①	テーマ	73	43
②	日本語	71	42
③	学習意欲の向上	17	10
④	異文化接触	9	5
合計		170	100

「活動から学んだこと」の記述回答は関連する内容に分類した(表7)。内訳は、①「テーマ」(73件,43%)②「日本語」(71件,42%)③「学習意欲の向上」(17件,10%)

16 加藤(2010:24)による。

④「異文化接触」(9件,5%)、合計170件である。

① テーマ

「テーマ」に関するものは、「若者言葉の実際の使い方」や「コンビニのアルバイトの状況」等、テーマに関する情報や気づきが見られた。

具体的には、「日本人の若者言葉は長く存在できる40年以上のものがある一方、短い時間に消えてしまうものも少なくない。祖母・祖父の前に若者言葉を使っていた」「困っている若者言葉の使い方と意味がわかった」「若者言葉を使う相手・場所・メリット・デメリット」「若者言葉を理解できないときは、困る必要はない。よく使う若者言葉だけ知ればよい」「若者言葉の使い方は男女で分かれている」「女性はある種の若者言葉は使わないほうがよい」等、若者言葉に関する実態や、「コンビニの深夜営業はもう日本に根付いている」「日本の職場は最初に思ったイメージと違い逆になった」「残業は日本人は嫌じゃない」「日本での就職は難しい。日本人の人たちは毎日苦勞している」等、コンビニや日本での就業に関するものがあつた。

② 日本語

表8 日本語に関する内容分類

項目		件	%
1	社会的な学習ストラテジー	21	30
2	スピーチスタイル	10	14
3	文法	9	13
4	音声	8	11
5	コミュニケーションスタイル	7	10
6	能力の低さ	6	8
7	語彙	4	6
8	適切で正確な使用	4	6
9	習得の難しさ	2	3
合計		71	100

「日本語」に関するものは、表8の通りである。最も多かったのは、1「社会的な学習ストラテジー¹⁷⁾」(21件,30%)であり、「本だけで日本語勉強するのはだめだと思う。やはり日本人と交流するのがよいと思う」「日本人との交流しながら勉強したほうがよい」「日本人の友人を作ったほうがよい」「自分の意見を恥ずかしがらずに話すほうがよい」等の記述が見られた。活動後には、ほとんどの留学生が「楽しい」という感想を抱いたことから(表3参照)、日本人との交流や日本の社会や文化の吸収を通して学習する社会的な学習ストラテジーの有効性を実感したことがわかる。

2「スピーチスタイル」については、若者同士で話す際の具体的な文末表現や、敬語の使い方、「ですます体」と「普通体」の使い分けが存在すること、複雑であるこ

17「質問する」「他の人々と協力する」といった学習ストラテジーの1つである(オックス

フォード1994:124)。

とについての記述が多く見られた。これには、「若者言葉」というテーマを扱ったことも影響しているが、日本人学生の実際のスピーチスタイルの使い分けを観察できていることがわかる。

5「コミュニケーションスタイル」では、「日本人は小さい口で話す」「やさしい話し方」「早口だ」等の記述があり、日本人学生のコミュニケーションスタイルの微細な特徴をよく観察していた。

また、6「能力の低さ」(6件, 8%) 8「適切で正確な使用」(4件, 6%) 9「習得の難しさ」(2件, 3%) もわずかに見られ、留学生自身の日本語力を客観的に捉える機会となっている。

③ 学習意欲の向上

「学習意欲の向上」(17件, 10%) については、「やはり留学生は日本人と話すほうがよい。書き言葉だけでなく口語も勉強しよう」「若者言葉・敬語を身につけたい」「言葉は足りない。日本語をもっと勉強する」「日本についての文化、自国と違う文化、価値観などをもっと知りたくなった」等、日本語や日本文化の学習意欲の向上がほとんどであった。

テーマとして取り上げる題材を工夫することにより、更なる学習意欲の向上や、就業意欲の向上等、多方面の意欲の向上を図る余地があるであろう。

④ 異文化接触

「異文化接触」(9件, 5%) に関しては、「異文化に興味を持つ人との交流はうれしい」「どこの国でも異文化交流に興味をもつ人

が多い」「自分が話す前に頭でよく考える。話す内容は相手がよく理解しているかどうか?」「日本人の考え方と微妙に違う」等があった。参加後の感想では日本人との差異を感じたり、共感が得られたという留学生が1～2割見られたが(表3参照)、具体的な記述は少ない。これにはテーマの選択や、活動の観察ポイントとして意識化する観点を明確に提示していないことも影響しているだろう。

5. まとめと考察

本研究では「日本人学生とのディスカッション」の実践例から、留学生の接触場面の参加意識を分析した。以下に結果をまとめ、考察する。

- 1) 活動参加前には、半数の留学生が不安を感じていた。これは、日本語力の低さを危惧するものや、接触場面に不慣れであることから生じていた。
- 2) 活動参加後は、情意面での肯定的評価が得られ、日本社会・文化、日本語に関する様々な気づきや学びを意識化していた。
- 3) 参加中の自己のコミュニケーションに関して意識している留学生は少なかった。
- 4) 日本人学生の参加による利点については、「日本人とのネットワークの拡大」「日本語学習の機会に適する」と捉えた留学生が多かった。更に、半数の留学生が「自国のことを日本人に話せる」ことを利点として意識していた。
- 5) 日本人学生の参加による問題点、接触

場面におけるインターアクション問題を意識している留学生はほとんどいなかった。

- 6) 日本語学習に関しては、「社会的な学習ストラテジー」の有効性を意識化する留学生が最多であった。
- 7) 異文化接触に関する気づきや学びを具体的に意識した留学生は少なかった。

上記結果から、先行研究で挙げられた利点と同様に、日本社会・文化の多様性を提示し、学習の動機付けの向上を図り、教育的効果を上げるというねらいは、全体的には達せられたと言える。

一方、特に上記2) 4) の結果は、前述のように、日本語クラスにおける「場面ホスト」であり、日本語による接触場面の「言語ゲスト」としての立場から参加したインターアクションに対する留学生の意識である。また、初年度の留学生であることから、ゼミ等、専門科目における継続的な日本人学生との交流が少ないことも影響しているだろう。

日本語教育の最終的な目的は、教室の外にある教師によって管理調整されていない接触場面で、自らの意思で適切なインターアクションがとれることである。これを念頭に置き、今後の接触場面の提供のあり方、教育プログラム構築に向けて取り上げるべき観点について考察したい。

まず、留学生の接触場面に対する不安を軽減する、日本語を使ったインターアクションに自信をつける、情意面での肯定的評価が得られるようなテーマ設定、継続的な接触場面のインターアクションが必要で

あろう。留学生が満足感を抱いた「自国のことを日本人に話す」機会の提供も有意義だと思われる。次に、接触場面を活用したインターアクションのテーマとして取り上げる題材、課題設定を工夫することにより、更なる学習意欲の向上や、日本社会での就業、キャリア構築意欲の向上、ブリッジ人材としての異文化調整能力、多様な価値観の創出の重要性への気づきの促進が期待される。一方、今回の調査では、意識化が不十分であった「自己のコミュニケーションの客観化」「接触場面におけるインターアクション問題」「異文化接触に関する具体的な気づき」について、事前指導や課題設定の仕方により、意識化を促進するための教育プログラムが必要である。

更に、本研究では接触場面における参加者の役割として「場面ホスト」「場面ゲスト」という概念を提示した。「言語ゲスト」であり「場面ホスト」である立場からの日本語クラスのインターアクションと専門科目でのインターアクションがどう異なるのか、日本語クラスの接触場面の活用が教室の外でどのような影響を及ぼすのか、インターアクションにどう活かされるのかは、今後の課題として調査する必要がある。

本研究は、小規模大学における初年度日本語教育プログラムにおいて試みた実践例から、留学生の接触場面に対する参加意識を分析したものであり、長期的、継続的、体系的に接触場面を取り入れるための教育プログラム構築に向けた萌芽的な研究と位置づけられる。

今後は様々な科目内容と教育目的に照らし合わせ、どのような種類の接触場面の提

供や活用があり得るか、そのバリエーションと有意義な活用の方法論の検討が課題とされる。

謝 辞

本研究の教育実践に向けた日本人学生の募集に当たっては、足立誠一郎氏（横浜商科大学元特任教授）に多大なご協力を賜りましたことを深く感謝いたします。

付 記

本研究は横浜商科大学特別助成金研究「接触場面を活用した日本語教育プログラムの教育的意義と可能性」の一部である。

参考文献

- オックスフォード, L.R. (1994) 『言語学習ストラテジー. 外国語教師が知っておかなければならないこと』 凡人社
- 加藤好崇 (2010) 『異文化接触場面のインターアクション. 日本語母語話者と日本語非母語話者のインターアクション規範』 東海大学出版会
- 北出慶子 (2010) 「留学生と日本人学生の異文化コミュニケーション能力育成を目指した協働学習授業の提案. 異文化間コミュニケーション能力理論と実践から.」 『言語文化教育研究』 9 (2) pp.65-90
- 末田美香子 (2003) 「日本人参加者を活用した会話授業.『日本人参加セッション』の試み.」 『専修国文』 73 pp.13-37
- 末田美香子 (2004) 「『日本語クラスビジター』を活用したアクティビティ. 教育的効果と実施上の問題点について.」 『専修国文』 74 pp.111-132

- 高橋三千代・古川嘉子 (2000) 「ビジターセッションにおけるロールプレイの効果. 1998 年度海外日本語教師長期研修『聴解口頭表現』における実践.」 『日本語国際センター紀要』 10 pp.33-50
- 館岡洋子 (2015) 「留学生と日本人学生がともに学ぶ『日本語クラス』. グローバル化する大学の学習環境のデザインとして」 『早稲田日本語教育学』 19 pp.61-71
- トムソン木下千尋・舩見蘇弘美 (1999) 「海外における日本語教育活動に参加する日本人協力者. その問題点と教師の役割.」 『世界の日本語教育』 9 pp.15-28
- ネウストブニー, J.V. (1995) 『新しい日本語教育のために』 大修館書店
- ファン, S.K. (2006) 「接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題」 国立国語研究所編『日本語教育の新たな文脈』 アルタ pp.120-141
- 堀井恵子 (2013a) 「留学生の就職とビジネス日本語教育の現状と課題」 ウェブマガジン『留学交流』 10 (31) pp.1-10
- 堀井恵子 (2013b) 「ビジネス日本語教育におけるシニアサポーター活動の意義と課題」 『Global communication』 2 pp.77-87
- 横須賀柳子 (2003) 「ビジター・セッション活動の意義とデザイン」 『接触場面と日本語教育. ネウストブニーのインパクト』 明治書院 pp.335-352

